

今、世界全体で温暖化対策を含めたエネルギーの大転換期を迎えています。しかしながら、日本はエネルギー転換については後発組と言われているのが現状です。今月号でご紹介する枝廣 淳子さんは、この危機感を発信するとともに、地球環境の現状や国内外の動き、新しい経済や社会のあり方、幸福度、レジリエンス(しなやかな強さ)を高めるための考え方や事例の研究をされています。

今回、枝廣さんのインタビューでは、レジリエンスなど私たちがこれからの予測不可能な社会を生き抜くためのヒントをたくさんいただきましたので、ぜひ参考にしてみてください。



“自分の人生の手綱は自分で握る
レジリエンスが、個人も組織も強くする”

東京都市大学環境学部 教授 幸せ経済社会研究所 所長 枝廣 淳子

「イーズ未来共創フォーラム」(主宰:有限会社イーズ)とは

「イーズが目指す未来」

イーズは、地球と未来世代、そして組織や地域の持続可能性を作り出す力になります。

ecology, english, empowerment, enthusiasm, energy, encounter... たくさんの「e」をつなぎ、厳しい時代の難しい「変化の担い手」を育てようと、e's (イーズ)は2003年4月に設立されました。今、地球を取り巻く環境はさらに厳しく、難しくなっています。企業・組織も地域も、そして個人にも、“単なる現状の延長線”には持続可能で幸せな未来はないでしょう。「変えなくてはいけない」、しかし「変化への抵抗」「現状を維持しようとする力」も大きく、動きがとれなかったり、必要なスピードで動けていなかったりしている状況も多くみられます。

真の問題は何なのか、本当に必要な変化はどのようなものなのか。多くの人が薄々とはっきりとわかり始めているこの時代に、企業や組織、地域、そして個人が本当に必要な変化を創り出せるよう、イーズは、さまざまな方法で「伝えること」「つなげること」「はぐくむこと」を通して働きかけ、地球と未来世代、組織や地域、または生活者一人ひとりの“持続可能性”を創り出す力になりたいと活動しています。



<http://www.es-inc.jp/>

今日CO₂をゼロに減らしても
今後数十年は温暖化が続く。
日本企業は世界標準の
環境の取り組みが急務!

——近年、地震や津波、台風などの自然災害やそれに伴う被害が世界レベルで増大しています。その根底にある地球が抱えるリスクについて、また、このリスクをどう回避し自然と共生していくべきでしょうか。

枝廣さん 日本は元々地震国です。地震と津波の被害は多く、以前調査した時は関東大震災の後に100人以上の犠牲者が出た地震は平均すると9年に1回起きています。熊本地震では幸いにも100人以上の被害はありませんでしたが、同規模の被害が起きており、日本は大きな地震の頻度が高い国と言えます。異常気象については、温暖化の影響がはじめており、それが顕著に表れているのが雨の降り方が変わってきていることです。今年、九州では局地的な雨が降りました。あれだけの雨が一度に降ることは過去例になく、こうした異常気象は今後ますます深刻に、そして頻度も増えていくことが予想されます。その中で企業がしなければならぬ

こととして、まず、原因となっている温暖化を止めることが挙げられます。企業が排出しているCO₂が温暖化を進めているのは確かです。売上を上げ続けるにしても、CO₂を排出せず利益を出していく取り組みが必要です。日本企業はどうしても他社との横並び意識が強く、環境分野でもCO₂排出基準に関しては経団連の設定する目標を守っていれば良いと考えがちですが、それだけでは不十分な状況です。現状では、今日CO₂をゼロに減らしても今後数十年は温暖化が続くと言われています。いったん大気中に出たCO₂は数百年残るからです。企業はCO₂を減らす努力とともに、温暖化への備えをすべきなのですが、残念ながら大きな動きは見られません。世界には、環境への取り組みを加速している企業がたくさんあります。パリ協定にしても、「化石燃料時代の終焉」と言われていますが、日本ではそういう報道もあまりされていません。このままでは、日本は世界から取り残されてしまうことに気づかなければなりません。もうすでに、世界の投資家はCO₂を排出する石炭には投資をしないという基準で投資対象を決定しています。海外の市場や投資家、消費者からの企業の環境への取り組みの見方

が、段々と厳しくなっていることに早く気づいてほしいと思います。

——多くの日本企業は、環境への取り組みについて世界から取り残されているのですね。

枝廣さん IT業界でもアップル、グーグルは環境先進企業としてブランドを構築しており、投資家も注目しています。近い将来、再生可能エネルギー100%にすると言っている企業はまだ少数という状況です。

例えば、ソニーは独自のビジョンを持っていきますし、富士通は、私も一部お手伝いをしていて、環境コミュニケーションに力を入れています。環境への取り組みは経営判断として利益につながりにくい印象があるかもしれませんが、それでは世界で通用しない時代にきている——このことを多くの日本企業は改めて認識しなければなりません。温暖化への備えの有無は、直に企業経営のリスクにつながります。以前タイで洪水が起こった時、工場が営業を停止したことで部品の供給がでなくなり、日本での生産がストップする事態となった企業がありました。備えは国内に閉じた話ではなく、サプライチェーンま

で考えなくてはならないのです。

——日本の中で最も環境の取り組みが進んでいる会社はどこですか？

枝廣さん 環境の取り組みには何段階があります。日本企業はできることしかビジョンに掲げない風習があります。トヨタやソニーは違います。それが、投資家や消費者の共感を呼び、社内が団結する力になることをご存じだからではないでしょうか。また、セイコーエプソンは高いビジョンを掲げて社内を動かし、技術を革新したことで知られています。備えという視点ではコマツが知られています。本社を東京から小松市に移転し、リスクを分散しただけでなく、職住近接によって女性が働きやすくなり、出産率が向上して注目されています。

——他社のCSRにも参画されていると伺いました。

枝廣さん 環境経営をよくしたいと思った時、社外の視点を取り入れることも必要です。ある企業とは講演をさせていただいたことがきっかけで、関わってほしいと連絡をいただきました。具体的には、環境CSR分野()

り管理したりしようとして、多くの方の手作りで運営しているNGOの活動が壊されてしまうことがあります。以前アイデンティティのままで、本人もその活動団体も不幸になってしまいます。そうならないように退職前の世代に自由参加でセミナーを行い、地域での振る舞い方について指導を行う企業もあります。事前に地域活動の仕方(マナー)を学んでから地域に参画する。会社や労働組合にとって、大切な観点だと考えます。

——ライフスタイルに関するこだわりなどはありますか？

枝廣さん 私は常々「人生のピークを90歳にもっていき〜」人生を推奨していきたくて考えており、このテーマの本も出版予定です。最近寿命が長くなり環境も充実し、人生90歳というのが現実的な時代になりました。90歳をピークに仕事勤めも退職後も楽しむ、人生を二度楽しむ「ダブル・メイン」が可能になったと思います。コース料理でメインが魚と肉の2つあると嬉しいように、人生を二度楽しめたらきっと幸せだと思います。

今、退職して地域に放たれた団塊世代には、自宅で一人テレビを見るだけ

のテーマでのディスカッションをこれまで25回開催しました。設定したテーマに関わる有識者を招いて討論するのですが、会社側からも関連する事業部、研究所の方などが参加。企業にとって多種多様なテーマで社外の方と議論をする場はとても刺激になるとともに、通常の営業活動ではアプローチできない人にもアプローチできているとのこと。ビジネスにつながっているものもあります。

予測不可能なこれからの時代。折れない組織や個人に求められるのはレジリエンス

——枝廣さんが最近注目しているトピックスを教えてください。

枝廣さん ここ1年力を入れているのはレジリエンス(再起力、折れずに立ち直る力)です。今後、外的状況がますます厳しくなるにつれ、個人にも組織にもレジリエンスが求められます。世界では折れる地域と折れない地域の違い、折れる企業と折れない企業の違い、個人でも折れる人と折れずにさらに成長する人の違いはどこにあるのかという研究が進み、要因もある程()

の生活になっていく方も多いと聞きます。これでは本人もつまらないし、社会としても大きな損失です。一人ひとりの幸せと社会の持続可能性を実現するために、ダブル・メインを主流にして、退職後の生活も充実したものにしていってお手伝いをしたいと考えています。

——ホームページの、エダヒロの本棚。ではさまざまなジャンルの本が紹介されていますが、「自身の読書スタイルについて教えてください。

枝廣さん 私には、①勉強したいテーマに関する読書、②人から勧められた本を読む読書、③楽しむための読書、の3つのスタイルがあります。

具体的に①は「幸せ」経済の仕組み、社会のあり方がテーマの本を読みます。この場合、本が分厚く読みにくいことが多いので、読書会(幸せ経済社会研究所主催)を活用します。毎月一冊、私が講師になって参加者に内容を要約して伝え、私の解説をもとにディスカッションを行います。参加者は読んでいなくても本を持っていなくても参加できます。これなら私は絶対本を読むことになり、話さなくてもならないため勉強するようになります。②は、自分では出会うことができない

度わかってきました。

レジリエンスのポイント、1つ目は多様性です。東日本大震災の際、電気がなかなか復旧せずオール電化の家はとても困りました。しかし、エネルギー源は太陽光パネル、ガス、プロパンなど多様な選択肢があればそれほど困らなくて済みます。この概念は企業からすると「冗長性」「無駄」と捉えられがちですが、企業として多様性をどう担保するのが課題と言えます。

2つ目はモジュール性、いざという時には自分たちで回せる仕組みです。日本の製造業を支えた「かんぱん方式」は、常に部品が流れてくるのが前提のため流れが途絶えた瞬間にストップしてしまいます。在庫があれば部品の供給が途絶えてもしばらくは在庫の部品で回すことができますよね。別の例では、島根県海士町の地域通貨が挙げられます。海士町には独自の地域通貨が流通しているため、もし日本経済の動きが止まっても海士町の経済は止まらずに回り続けます。

3つ目が、迅速なフィードバックです。適切な連携が取れていないと情報が行き届かず、対応が手遅れになったり不祥事などの問題が起こる原因となります。

レジリエンスは、今後ますます()

い本を読み、新たな興味が広がることもありとても参考になります。③では時間の使い方や本の読み方、勉強の仕方に関する本を読んでいます。自分でも色々工夫するのが好きなので。

——最後に、組合員へメッセージをお願いします。

枝廣さん 私は、社会全体、一人ひとりがそれぞれの持てる力・持つて生まれた力を最大限発揮できる社会、発揮できる人になることができればよいなと思っています。私たちはたくさんの方の可能性を持って生まれますが、生きていく間に活かすきれない人が多くいます。

幸せなことは人によって異なりますし、色々な考え方を人々がいます。それを互いに認め、受け入れ、各々が持つ力をさらに磨いて発揮し、社会に貢献する形で還元されるのが多くの人の幸せにつながるはず。そして、皆さんに

重要となってきました。個人の終身雇用

が維持される時代、何かに頼りきって一生を終えられる時代は終わりました。(有)イーズでは、個人向け、企業・組織向けにレジリエンスを高めるセミナーを開催しているため、退職を控えた正社員対象の研修例をご紹介します。

この研修では、まず自己紹介を行います。自分の名刺にある組織の部門名と役職名を修正ペンで消し、名前のみで自己紹介してもらいます。女性には問題なくできますが、多くの場合男性は戸惑われます。会社以外のアイデンティティがなく、たとえば「この会社の部長」という一つのアイデンティティで生きていることがわかります。もしそれがなくなると、折れてしまう、可能性もあります。自分は「○○の夫」「○○の父親」「地域の野球チームのコーチ」「同窓会の幹事」であるなど、個人でもアイデンティティの多様性を担保しておくことが重要です。

名刺の肩書きを消しても充実した人生を生きていくためには、地域の活動でも趣味でも何かに参加することをお勧めしています。ただ気をつけていたいただきたい点もあります。以前、団塊世代の方々が退職後地域で活躍しようとして、部長の意識のままに指図した()

は、一人ひとりが自分の人生の手綱を握って生きてほしいと思います。孤高の人になれというわけではありません。「誰かの意見を私はこう取り入れた」と、手綱は自分であることを意識して人生を歩んでほしいです。企業で働いていたとしても、企業に魂を売っているわけではありません。小さなことから意識的に挑戦することはできます。これはレジリエンスの一つであり、自分で判断して考える力がこれからさらに重要になるでしょう。何にしても「他人に言われたから」ではなく、決断したのは自分であることを意識してもらえたらと思います。

著書紹介



レジリエンスとは何か
——何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる

著者 枝廣 淳子
価格 1,836円(税込)
発売日 2015年3月13日
出版社 東洋経済新報社



データでわかる 世界と日本のエネルギー大転換

著者 レスター・R. ブラウン、枝廣 淳子
価格 670円(税込)
発売日 2016年1月9日
出版社 岩波書店